



平成23年度第4回講演要旨

『「武家の古都・鎌倉」のこれから』

講師：阿部能久さん(鎌倉市世界遺産登録推進担当 学芸員)

とき：平成23年11月5日(土) ところ：鎌倉芸術館

◎鎌倉の再認識

「武家の古都・鎌倉」というのは鎌倉時代で終わったわけではない。以前は1333年に鎌倉幕府が滅び、鎌倉はそのまま衰退していったと思われがちのところがあったが、考古学的な成果も含む1980年代以降の研究の進展によって、室町時代の鎌倉が鎌倉時代同様、あるいはそれ以上に繁栄していた可能性があることがわかってきた。

室町時代の鎌倉の実像がうかがえる興味深い史料として、1471年に李氏朝鮮の領議政(宰相)であった申叔舟が編纂した『海東諸国紀』がある。その中の地図では、鎌倉は「日本国都」である京都と同様に丸く強調して描かれており、当時鎌倉が京都とならぶ日本の都として、朝鮮においても認識されていたことがわかる。また『海東諸国紀』中の「日本国紀」には、幕府将軍足利氏の一族で、鎌倉の主(鎌倉公方)であった足利成氏が幕府に反旗を翻して20年近くが経つが、幕府将軍がこれを打倒することができないでいるという、現在の日本でもあまり知られていないような歴史的事実がきちんと記されている。しかも成氏のことを「鎌倉殿」と記している点も注目される。

このように、いまでは忘れ去られた存在となってしまった「室町時代の鎌倉」も、当時はその様子が海外に伝わる程であったという事実、いま一度目を向ける必要があるのではないか。

◎室町時代の鎌倉

室町幕府の施政方針が書かれた「建武式目」の冒頭で、幕府を京都と鎌倉のどちらに置くかについて書かれており、当時の鎌倉が東国の首都的な機能を有し続けていたことを如実に物語っている。結局幕府は京都に置かれるが、当時はまだ南北朝争乱の最中であり、鎌倉の押さえも重要であった。そこで足利尊氏の息子で、2代将軍義詮の同母弟である基氏が、関東を管轄する初代の鎌倉公方となった。

この鎌倉公方がトップに立つ鎌倉府は、「関東を支配するための幕府の機関」という説明がよくされるが、実は幕府の他の地方支配機関とは大きく性格が違っていた。その管轄国は関八州と伊豆・甲斐の10か国に

および、1392年以降には更に陸奥・出羽が管轄下に入り、ほぼ東日本全体を支配することとなった。これは幕府の単なる一機関というよりは、幕府に匹敵する存在であったといつてよい。また、トップが「公方」すなわち将軍と呼ばれ、その補佐役が幕府同様に「管領」とされている点からも、鎌倉府の権限の大きさがうかがえる。

しかしその権限の大きさのために、幕府将軍と鎌倉公方の対立が代々にわたって起こるようになる。4代目公方持氏の時期になると、その対立は抜き差しならないものとなり、1416年の上杉禅秀の乱、そして1438年の永享の乱といった大乱へとつながっていく。



伝足利持氏供養塔
(紙良輔氏提供)

永享の乱の結果、鎌倉公方持氏は敗死し、一旦鎌倉公方は断絶するが、持氏を滅亡に追い込んだ将軍義教が嘉吉の乱で暗殺されたこともあって、持氏遺児の成氏を新たな公方として、鎌倉府は再興されることとなる。しかし公方と、幕府を後ろ盾とする関東管領上杉氏との対立が続き、1454年に公方成氏が関東管領上杉憲忠を暗殺するに至る。これに

端を発する享徳の乱の渦中で成氏は鎌倉を離れ、それ以降、鎌倉は次第に衰退していくこととなる。

◎「武家の古都・鎌倉」の連続性とこれから

このように、「室町時代の鎌倉」も、鎌倉時代に引き続き「武家の都」であった。もちろん鎌倉にとって、鎌倉時代が一番輝かしい時代であることは間違いないが、その後断絶して今の我々があるわけではない。鎌倉時代以後の歴史があつて今に至るということにも、目を配っていく必要があるのではないかと思います。例えば鎌倉府の儀礼について書かれた『鎌倉年中行事』という書物からは、現在も京都でみられる山鉦が巡行するような祇園祭が、当時鎌倉でも行われていたことがうかがえる。このような史実が鎌倉にあったということを正しく理解することも、今後「武家の古都・鎌倉」を指針とするまちづくりにおいて重要な意味をもつのではないかと。